

# 目 次

## 第一章 原始時代

- 1 縄文文化……………5  
東アジアと日本……………5  
縄文式土器とともに……………6
- 2 弥生文化……………7  
弥生式土器とともに……………7  
国々の発生……………8

## 第二章 古 代（一）

- 1 古墳文化……………11  
大和朝廷の国家統一……………11  
古墳文化……………11
- 2 飛鳥文化……………13  
儒学・仏教の伝来……………13  
聖徳太子……………14  
飛鳥文化……………15

## 第三章 古 代（二）

- 1 奈良時代の文化……………17  
大化改新……………17  
都城の造営……………17  
通貨の鑄造……………18  
国史・地誌の編纂……………18  
遣唐使……………18  
白鳳文化……………19  
国家仏教……………20  
天平文化……………20  
学問・文学……………21
- 2 平安初期の文化……………22  
政治の刷新……………22  
平安初期の文化……………22

## 第四章 古代(三)

1 平安中期の文化	25
対外関係の変化	25
国風文化	25
仮名の成立	26
国文学の発展	26
浄土思想と美術	27
2 平安末期の文化	28
政権の公武転換	28
平安末期の文化	28

## 第五章 中世

1 鎌倉時代の文化	31
幕府の創設	31
武士の生活	31
仏教の革新	32
美術	33
学問と文芸	34
蒙古の襲来	35
2 室町時代の文化	36
北山文化	36
対外貿易	36
東山文化	38
庶民文芸	39
文化の普及	40

## 第六章 近世(一)

1 西洋文化との接触	41
ヨーロッパ人の東洋進出	41
鉄砲の伝来と南蛮貿易	41
キリスト教の伝来	42
2 織豊時代の文化	44
国家統一と商業・貿易	44

	朝鮮出兵	45
	桃山文化	45
	南蛮文化	46
第七章	近世(二)	
	1 鎖国	49
	江戸幕府の成立	49
	家康の通商政策	49
	日本人の海外発展	50
	キリシタン禁圧	51
	鎖国	51
	2 元禄文化	53
	文治政治	53
	学問の振興	54
	町人文化の発達	54
第八章	近世(三)	
	1 江戸文化の成熟	57
	化政文化の性格	57
	儒学	57
	文芸	58
	美術	58
	2 新しい学問	59
	国学	59
	洋学と自然科学	60
	新しい社会批判	61
	3 開国と幕府の滅亡	62
	世界の情勢	62
	開港と攘夷論	63
	経済界の混乱	64
	大政奉還	65
第九章	近代(一)	
	1 明治維新	67

	新政府の革新	67
	文明開化	68
<b>2</b>	<b>大陸への進出</b>	<b>69</b>
	条約改正	69
	産業革命の開始	69
	列強の世界政策	70
	東アジアと日本	71
	日清戦争	71
	列強の中国分割	72
	日露戦争	73
	大陸政策の進展	73
<b>3</b>	<b>近代文化の形成</b>	<b>74</b>
	宗教と教育	74
	学問の発達	76
	近代文学の発達	76
	音楽と演劇・美術	77
第十章 近代(二)		
<b>1</b>	<b>破滅への道</b>	<b>79</b>
	第1次世界大戦	79
	第2次世界大戦	80
<b>2</b>	<b>近代文化の発展</b>	<b>81</b>
	自然科学	81
	思想と教育	81
	文芸	82
	美術	83
<b>3</b>	<b>現代</b>	<b>83</b>
	戦後の日本	83
	(付録) 重要歴史年表	86

# だいよんしょう こ だい さん 第四章 古 代 (三)

## 1 へいあんちゅうき ぶん か 1 平安中期の文化

たいがいかんけい へん か  
対外関係の変化

けんとうし へいあんちゅうしよ き ほ けん どう おとろ  
遣唐使は平安朝 初期にも派遣されたが、唐が衰え、  
ぶん か み すくな ねん  
その文化にも見るべきものが少 くなったので、894年、  
すがわらのみちざね けん ぎ はいし ねんとう ほろ ごだいそうらん  
菅原道真の建議によって、これを廃止した。のち907年唐は亡び、五代争乱の  
よ なら じだいらい くにつうこう ぼっかい ねん ぎったん  
世となった。また、奈良時代以来わが国に通航していた渤海は926年に契丹に  
ま ねん ちゆうせん しらぎ こうらい  
ほろぼされた。間もなく、935年、朝鮮でも新羅がほろびて高麗がかわった。

このように、日本の近隣諸国には変動がはげしく、その間に1019年刀伊賊  
じょしんぞく きたきゆうしゆうらいこう ちようてい たいがいてきたい ど きわ しょうきよくてき  
(女真族)の北九州来寇などもあり、朝廷の対外的態度は極めて消 極的  
ねんちゆうごく どういつ そう しょうせん らいこう の に  
となり、ただ960年中国を統一した宋の商船が来航したり、これに乗って日  
ほん にっそう じゅんれいそう み てい ど くに こうしき つかい ほん  
本から入宋する巡礼僧を見る程度で、どの国にも公式の使は派遣しなかつ  
た。

こく ふう ぶん か  
国 風 文 化

がいこくかんけい きはく せいけん ふじわらし どくせん せつかん  
外国関係が稀薄になり、政権は藤原氏が独占して摂関  
せいじ ちゆうしん きぞく ゆうえつてき ち  
政治をおこし、これを 中心とする貴族の優越的地位  
かくてい しょうえん かれら けいざいてき きばん きぞく ゆうかんえい  
は確定し、荘園という彼等の経済的基盤もかたまってくと、貴族は有閑榮  
が せいかつ ひ おく かれら しゅこう まか ないがい  
華な生活に日を送るようになった。彼等はその趣好に任せて、これまでの内外  
ぶん か そしゃく にほんふう ぶん か じゆうせい  
の文化を咀嚼し、日本風の文化を醸成した。

きぞく じゆうきよ いぜん からふう きゆうしつけんちく だっ か あら しんてんづくり せい  
貴族の住居は、以前の唐風の宮室建築から脱化して、新たに寝殿造が成  
りつ や ね こうばい ひわだぶき ちゆうおう なんめん しんでん せいいでん  
立した。屋根は勾配ゆるやかな檜皮葺で、中央に南面した寝殿(正殿)があ  
ひがし にし きた たいのや もう ぜんてい いけ つきやま なが い いけ  
り、東・西・北に対屋を設け、前庭には池や築山や流れをとり入れた。池に  
ふね うか しいか かんげん きょう はい ゆうえん ごらく うたあわ  
舟を浮べて詩歌管絃の興に入る遊宴もあった。そして娯楽には歌合せなども

あり、国文学の発達と照応した。男子の服装は、儀式には衣冠束帯をつけ、平時は直衣や狩衣を着た。女子は儀式には色とりどりの単衣を重ねた十二単衣をつけ、平時は単衣や小袷を着た。贅をつくした調度品の中でも、蒔絵がこの時代に独特の進歩を見せた。

**仮名の成立**

古事記や万葉集は漢字の音や訓によって国語を表現したが、これは極めて不便であった。平安時代に入ると、漢字の草体をさらに簡略にして平仮名が、また、漢字の偏やつくりを取って片仮名が工夫され、音表文字として使用されることになったから、日本人の思想や感情は自由に表現できるようになって、国文学がいちじるしく発達した。

**国文学の発展**

平安初期には漢詩文に圧倒されたかに見えた和歌も、在原業平・小野小町・僧正遍照等、いわゆる六歌仙が現れるにおよんで、ふたたび盛んになった。10世紀に入ると、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒等によって最初の勅撰和歌集である「古今和歌集」が撰ばれ、つづいて「後撰和歌集」「拾遺和歌集」（合わせて三代集）が勅撰され、その後、「後拾遺和歌集」「金葉和歌集」と和歌全盛の時代に達した。当時の和歌は洗練された技巧、整えられた美しさにおいては、前後に比を見ないが、真情を吐露することが少ない。又、藤原公任撰による和歌と漢詩の「和漢朗詠集」も成立した。

このころ貴族は入内させる女子の侍女として、教養の高い婦人を求めたから、女流文学者が多数あらわれたが、和歌では和泉式部・赤染衛門がすぐれていた。

物語は「竹取物語」にはじまり、その後「宇津保物語」「落窪物語」「伊勢物語」「狭衣物語」など多くの物語があらわれた。中でも11世紀

# 第六章 近世(一)

## 1 西洋文化との接触

ヨーロッパ人の東洋進出 戦国の諸大名が各地に割拠して、たがいに争っていたころ、ヨーロッパでは商業が発達し、航海術も進歩して海外との貿易がさかんになった。十字軍の遠征(11~13世紀)以後、ヨーロッパとアジアとの貿易は主として地中海航路を通じておこなわれていたが、15世紀中ごろ、地中海の東岸小アジアにオスマン=トルコがおこってアジアへの交通を妨げたので、それまでの貿易は大きな打撃をうけた。当時スペイン・ポルトガルの両国では国王の権力が強くなり、中央集権的な専制国家の体制をととのえていたが、東方との貿易の利益によって国力を充実させようとして新航路の開拓にのりだした。

コロンブスはスペインの援助のもとにアメリカ大陸を発見し、ポルトガル人ヴァスコ=ダ=ガマはアフリカの南端喜望峰を廻ってインド西岸のカリカットに達する新航路を発見した。こうして16世紀にはいると、この両国は海外に向って大いに発展した。

ポルトガル人はインドのゴアに総督をおき、セイロン・マラッカを占領し、さらにマカオ(澳門)を根拠として中国貿易をはじめた。

スペイン人は中南アメリカの大半を領土とし、多量の銀を本国に送った。さらにルソン島にマニラ市を建設し、ここを東洋貿易の根拠地とした。

戦国時代の末にちかい1543年(天文12)シヤムから中国の寧波に向おうとしたポルトガ

てっぼう でんらい なんはんぼうえき  
鉄砲の伝来と南蛮貿易

ル船が、九州の種子島に漂着した。これがヨーロッパ人渡来のはじめである。このとき島主種子島時尙はポルトガル人から鉄砲を買い入れたが、ちょうど戦国争乱の最中だったので、大名は争ってこの有力な武器を手に入れようとし、渡来から10年後にはすでに九州各地や堺などで、その製造が行われるようになった。鉄砲が普及すると、今までの弓や刀を武器とした騎兵中心の戦法は歩兵中心の戦法にかわり、築城術も大きな影響をうけた。

ポルトガル船はこれからほとんど毎年九州に来航し、イスパニヤ商人も16世紀末ごろから日本と貿易をはじめた。かれらは主として日本の銀と中国の生糸や絹織物とを交換する仲介貿易をおこなった。そのころの中国(明)は倭寇を防ぐためにきびしく貿易を統制したので、日本との直接の貿易は一時中断し、ポルトガル人はその仲介貿易によって大きな利益をあげた。九州各地の大名は、貿易の利益とともに珍奇な品を求め、争ってポルトガル船を自領の港に招いた。ポルトガル人・イスパニヤ人はともに南蛮とよばれたから、この貿易を南蛮貿易という。

**キリスト教の伝来** 南蛮貿易の開始にともなって、キリスト教が日本にはいつてきた。キリスト教をはじめて日本

に伝えたのは、1549年(天文18)鹿児島に到着したフランシスコ＝ザビエルである。ザビエルは薩摩の島津氏や周防の大内氏など諸大名の許可を得て布教をおこなった。

15・6世紀におけるポルトガルおよびイスパニヤ商人の東洋進出は、その特色として、キリスト教の布教をともなうものであった。「胡椒と靈魂のために」というのが、当時探検に出かける人々の合言葉であった。その頃、ヨーロッパはルネッサンスの開花とともに教会の内部には改革運動がおこ



## 重要歴史年表

### 日本史

■は現存建築物

#### 縄文式文化

#### 弥生式文化

#### 飛鳥時代 (552~645)

552頃 仏教伝わる

562 任那日本府亡ぶ

593~621 聖徳太子の摂政

607 遣隋使の始め (小野妹子)  
法隆寺創建?

622 聖徳太子歿 (574~)

630 遣唐使の始め (犬上御田鎌)

#### 白鳳時代 (奈良前期645~710)

645 大化改新 (年号の初め)

670 法隆寺焼失 (日本書紀による)

672 壬申の乱 飛鳥京に遷都

701 大宝律令成る

708 和銅開宝

■法起寺三重塔創建

#### 天平時代 (奈良本期710~749)

710 平城京 (奈良) に遷都

712 古事記成る

730■薬師寺三重塔建つ

### 東洋史 (\*印) 及び西洋史

BC771~403 \*春秋時代

500~449 ペルシア戦争

403~221 \*戦国時代

336~323 アレクサンドル大王在位

221 \*〔秦〕 始皇帝天下を統一

202 \*前漢の成立

27 ローマ帝政となる

AD25 \*〔後漢〕 光武帝、後漢成立

375 西ゴート、ドナウ河の南へ移る  
(民族大移動の始め)

589 \*〔隋〕 天下の統一

570頃~632 マホメット

618 \*唐おこる